

特集



60周年特別企画 「岡大・知の系譜」シリーズ3

新制・岡山大学

～学都へ、さらなる飛躍～

60周年特別企画

「岡大・知の系譜」シリーズ3として、
今回は本学の創立以来60年の歴史を振り返り、
あわせて本学の未来を展望する。

学都とは

国立大学法人は今年度（平成二十一年度）で六年間の第一期中期目標期間が終了し、来年度（平成二十二年度）から、第二期中期目標期間に入る。この第二期において千葉喬三学長が目標として掲げているのが「学都・岡山大学の創成」である。「学都・岡山大学」とはどういう意味を持つのか。本学の発展と改

革を千葉学長の言葉とともにふりかえりつつ、探っていきたい。

全国屈指の総合大学

本学の擁する学部数は十一。これは国立大学で二番目に多い数であり、かつ、あらゆる学問領域をカバーできるような構成になっている。「学生の可能性を早いうちに狭めてしまふのは良くない。多様性を準備して



▲昭和31年に建立された正門より臨むいちよう並木と刻まれた碑文



おくのが大学の責務。本学は多様性を用意できている」と千葉学長は胸を張る。では、いかにしてこのような多様性を獲得したのか、その歴史をふりかえってみたい。

5学部で出発

昭和二十四年十月二十二日、岡山県民の総意を結集した団体「設立期成会」主催の岡山大学開学祝賀会が盛大に挙行され、法文学部・教育学部・理学部・医学部・農学部との5学部体制で新制・岡山大学が船出した。法文学部は第六高等学校文科、理学部は同じく六高の理科、教育学部は岡山師範学校・岡山青年師範学校、医学部は岡山医科大学、農学部は岡山農業専門学校、とそれぞれ岡山地域に存在した高等教育機関をその前身としている。また、岡山医科大学附属病院・放射能研究所(鳥取県三朝)も同時に本学に移管された。なお、大原農業研究所はやや遅れて昭和二十六年に移管されている。初代学長には、林道倫・岡山医科大学科長(1885~1973)が就任した。林学長は日本ではじめて

精神科に生物学的研究を取り入れた精神医学の大家であり、学長にふさわしく、気骨ある博識英邁の人物であったという。本誌の名前の由来であり、本学のシンボルでもある津島キャンパス正門通りのいちよう並木は、林学長が昭和二十七年に退官された際、寄贈されたものである。

広大なキャンパス

創立にあたって、キャンパスは前号で述べたように、旧陸軍四八部隊の跡地を確保し、津島キャンパスとした。津島・鹿田の二つのキャンパスはあわせて校舎面積約58万平方メートル。東京ドーム16個分の大きさをもち、創立当時は国立大学として二番目の広さであり、現在でも三番目の広さを誇っている。

地元の熱意で工学部・法文学部経済学科が誕生

昭和三十年代、いわゆる高度成長期を迎え、岡山県でも水島臨海工業地帯形成が進展。地元への技術者の供給の期待が大学に寄せられるようになり、三木行治県知事ら行政や地元産業界からの強い要望に応じ、昭和三十五年(1960)に工学部が創設され

た。また、昭和三十六年、岡山経済同友会は地元産業界のため、本学に経済学部の新設を要望する決議を採択。こうした動きを受け、昭和四十年、法文学部に経済学科(後の経済学部)が



▲27日全学集会(昭和44年3月)

こうした事態に対し、学生の正当な要求を汲み上げ、早急に大学改革を行うことを決定し、昭和四十四年、『岡山大学改造草案』を発表。当時の谷口澄夫学長はこれを大学改革の叩き台として大

設立された。なお、岡山経済同友会との協力は現在でも続き、同会のメンバーによる特殊講義(ポランティア・プロフェッサー)が経済学部で開講され、学生の好評を博している。

岡大紛争が

大学院設置のきっかけに

昭和四十年代、全国の大学に学生運動の嵐が吹き荒れる。本学でも昭和四十三年に「岡大紛争」が勃発する。自衛隊車両の南北道路通過に対する学生の抗議に端を発する。この紛争は、時代の風潮の中で激化の一途をたどり、ついに学生による全学ストライキの決行という事態を招いてしまう。

とした待望の改革案であったと回顧している。この改革案では、「学部間セクシヨナリズム」と学部間格差の改善のため、すべての学部に大学院の設置を提言している。これを受け、昭和四十六年、法文学部と工学部に大学院が設置。昭和五十五年には教育学研究科が設置され、すべての学部に大学院が設置されることになる。大学紛争は大学当局・学生双方にとって苦い経験であったが、大学発展の契機となったともいえる。

法文分離と

薬学部・歯学部の創設

岡大紛争を乗り越え、さらに発展を続けた。昭和五十三年、薬学部



理工学部が創設される。当時、設置準備室長として同学の創設に携わった河野前学長は、「岡山は豊かでバランスのとれた自然環境があり、かつ産業もバランスよく構成されており、日本の環境モデル地区となり得る要素を保有して

いる。そこに『環境』に関する教育研究拠点を作るといふ意義は極めて大きい」と語る。なお、平成十七年には、大学院として、文理医融合の理念のもと、大学院環境学研究科が設置されている。同研究科は、平成十九年にアジア唯一の「持続可能な開発のための研究と教育」を目的とするユネスコチャアの認可を受け、環境問題に関して、日本はもとより国際的に活躍できる人材の育成に努めている。

また、平成十六年に一大転機が訪れる。政府の方針による全国立大学の法人化である。これは各国立大学を国から切り離して法人格を与え、自主性・自立性を高め、各大学の教育・研究活動を活性化させ、それぞれ特色を出していくために行われた改革である。運営は学長のリーダーシップの下、学長と理事により構成される「役員会」によるトップマネジメントで行われ、それを、学外有識者が加わり経営面を審議する「経営協議会」と、教育研究面を審議する「教育研究評議会」が支える構造となった。また、教職員は、兼業などをスムーズにし、産学連携を推進するため、非公務員化された。

この改革は、国立大学の自立性を高めたが、同時に、厳しい競争を強いることになる。本学はこの状況に対応すべく、改革を進めていった。まず改革の成果を評価するシステムとして、法人化当時副学長だった千葉学長は、教員の実績を評価する制度をトップダウンで導入した。「強い反対もあったが、教員は税金と学生の納付金を預かって仕事をしている。その領収書を求められているんだ」と言って説得しました。こうした管理・運営面での改革は高い評価を受けており、国立大学法人の評価委員会による国立大学法人中間評価で「中期目標の達成状況が非常に優れている」と折り紙をつけられ、「評価の岡大」と呼ばれているほどである。

▲岡山大学病院では高度な医療が行われている



昭和55年頃の文法経講義棟▶

が医学部から分離。昭和五十四年には、岡山県歯科医師会の県知事に対する陳情などの動きを受け、歯学部が創設された。さらに昭和五十五年には、法文学部が念願の文学部・法学部・経済学部の3学部への分離を果たす。これは現代社会の巨大な構造変化に対応すべく、研究組織の改革と新しい人材の育成を求める時代の要請に応えるものだった。

環境理工学部の創設

平成に入ると、世界的に環境問題が重要な課題としてクローズアップされるようになってきた。このような社会情勢を背景に、平成六年、国立岡山大学初の環境系学部として環境理工学部が創設される。当時、設置準備室長として同学の創設に携わった河野前学長は、「岡山は豊かでバランスのとれた自然環境があり、かつ産業もバランスよく構成されており、日本の環境モデル地区となり得る要素を保有して

法人化という大転換点

また、平成十六年に一大転機が訪れる。政府の方針による全国立大学の法人化である。これは各国立大学を国から切り離して法人格を与え、自主性・自立性を高め、各大学の教育・研究活動を活性化させ、それぞれ特色を出していくために行われた改革である。運営は学長のリーダーシップの下、学長と理事により構成される「役員会」によるトップマネジメントで行われ、それを、学外有識者が加わり経営面を審議する「経営協議会」と、教育研究面を審議する「教育研究評議会」が支える構造となった。また、教職員は、兼業などをスムーズにし、産学連携を推進するため、非公務員化された。

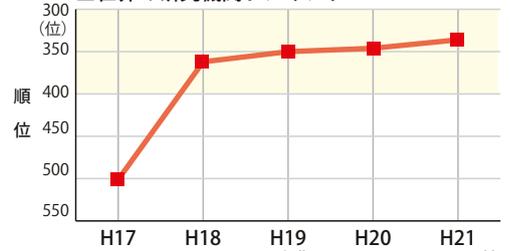
「評価の岡大」

この改革は、国立大学の自立性を高めたが、同時に、厳しい競争を強いることになる。本学はこの状況に対応すべく、改革を進めていった。まず改革の成果を評価するシステムとして、法人化当時副学長だった千葉学長は、教員の実績を評価する制度をトップダウンで導入した。「強い反対もあったが、教員は税金と学生の納付金を預かって仕事をしている。その領収書を求められているんだ」と言って説得しました。こうした管理・運営面での改革は高い評価を受けており、国立大学法人の評価委員会による国立大学法人中間評価で「中期目標の達成状況が非常に優れている」と折り紙をつけられ、「評価の岡大」と呼ばれているほどである。

人材養成・高度な医療で地域に貢献

このような評価システムを整えたうえで、「教育」と「研究」そして「地域貢献」の三つの観点で改革を強力に推進している。地域貢献の面では、時代の要請にあわせ、平成十六年に法科大学院、平成十八年に社会文化科学研究科・組織経営専攻（ビジネススクール）、平成二十年に中国地方唯一となる教職大学院、と次々に高度専門職業人養成のための機関を設立し、地域に有為な人材を輩出している。また、岡山大学病院は、「医療先進県岡山」の象徴として、その高度な研究成果を地域に還元している。とくに、が

■世界の研究機関ランキング



出典：トムソン・ロイター社

ん、救急、遠隔地、周産期などの医療において、めざましい成果を上げ、地域医療の充実に貢献している。

多様性を生かした教育を実施

教育面では、法人化前から、それまで各学部が存在した大学院を各学問系統ごとにまとめた総合大学院制を施行し、多様性を活かす構造をつくりだしていた。法人化後には、この多様性をさらに活用すべく、総合大学という本学の特性を活かし、既成の学部・学科のカリキュラムの枠組みを越えて履修プログラムを作れるマッチングプログラムコースを設立し、話題を呼んだ。また、所属学部以外の学部の専門教育を履修できる副専攻コース制度も設けている。

研究戦略は「異分野融合」

研究における戦略が「異分野融合」である。「どんな学問も、異分野が融合して飛躍的な発展が生まれていく。多様性に富んだ総合大学である本学は、異分野融合を大きな特色にしていかなければならない」と千葉学長は語る。

現在、「異分野融合」という戦略のもと、さまざまな取り組みが行わ

れている。その象徴的存在が、平成二十年創設の「異分野融合先端研究コア」である。これは従来の教育組織と切り離された研究機関で、若手研究者が挑戦的な異分野融合領域の研究を行っており、その成果が学内外からの注目を集めている。また、ナノテクノロジーとバイオテクノロジーの融合により、がん治療を目指す「ナノバイオ標的医療研究」プロジェクトなど、意欲的な研究を推進している。

これらの研究推進は着実な成果をあげており、トムソン・ロイター社発表の「世界の研究機関ランキング」でも毎年順位を上昇させ、とくに近年の上昇が目立つとコメントされているほどである。

また、「研究推進産学官連携機構」を発足。産学連携を強力に推し進め、平成十九年度大学発ベンチャー設立数で全国一位（通商産業省発表）、平成二十年度大学・研究機関の特許資産の規模ランキング（株式会社パテント・リザルト発表）において全国公立大学の中で五位にランキングされるなど、大きな成果をあげている。

「天地人」の備わった岡山大学

このように、第一期中期目標期間において、本学の改革は高い成果をあげたといえる。そして、第二期中期目標期間開始において、千葉学長が掲げるのが「学都」構想である。

『都』には『集める』、『統べる』という意味がある。中国・四国には核となる旧帝国大学が存在しない。『天の時』、『地の利』、『人の和』、この『天地人』がそろったときには、じめて物事は成就する。岡山は交通

アクセスが中国四国地方でもっともよく、気候も温暖で、広い平地と豊かな緑を持つという『地の利』がある。さらに、全国から多くの優秀な研究者が集まっているという『人の和』がある。そして、法人化

によって、自らの裁量によって個性を発揮できるようになった今こそが『天の時』、『天地人』の備わった本学が中国四国の学問を集め、統轄する中核大学となる」という意志を表明したものである。

学都の創成

以上、見てきたように、「学都・岡山大学の創成」とは「多様性に

富んだ総合大学という特色を生かし、異分野融合を戦略とし、本学を中国四国の学術の中心拠点とする」ことを意味する。

「第二期中期目標期間では、今までの改革の成果を基礎として、教育の充実を大きな目標とした。創立六〇周年を機に、さらに改革を推し進める。本学は必ずや『学都』になる」。

千葉学長の決意は固い。

